校内研修計画

（１）研修の目的

①　学校教育目標の具現化のために、学園生の実態に即し、創意工夫を生かした特色ある教育活動の展開を推進する。

②　専門職としての自覚に立ち、研修を通じて、教師としての資質・指導力の向上を図り、学園生の生きる力を育む。

（２）研究の方針

①　全職員の共通理解の下、研究主題に迫るため、学園全体制で授業研究及び日々の授業実践を中心に研究を推進する。

②　研究内容は、「主体性・協働性・創造性」を高める授業の展開を模索し、授業改善を図る。

③　各ステージや部会相互の連携を密にし、研究の効率化・円滑化を図る。

④　研究実践を積み上げていく中で、学園生の変容や成果を的確にとらえ、その成果を評価しながら研究を推進する。

⑤　情報収集に努め、各指導機関からの指導・助言を受けるとともに、地域・保護者との連携を図りながら、研究を推進する。

（３）本年度研究主題

主体的に学習に取り組み、考えを深める子どもの育成

（４）主題設定の理由

①　本村の取組から

本村の教育改革の理念は、「産山で教育を受けてよかったと実感できる教育の創造～０歳から生涯にわたる魅力ある教育を目指して～」である。「じっくり・しっかり・のびのび」をキーワードに、特色ある教育課程、コミュニティースクール、ヒゴタイ交流を核とした英語教育の充実、ICT 教育の推進で、系統性・連続性のある確かな学びの確立を行い、産山村の児童生徒に適した教育内容の創造に取り組んでいる。また、令和３年度には、「第２期産山村教育大綱が策定され、グローバル化の進展や急速な技術革新など変化の激しい社会に対応できる能力を身に付けるとともに、どのような予測困難なことがあっても主体的に学び、

判断し、行動し、未来を切り拓いていく「生きる力」が必要とされている。さらに、ＳＤＧｓの理念に沿った「誰一人取り残されない、持続可能な社会」の実現に向けた視点の学びもより一層重要視されている。これらのことから、義務教育学校の特性を生かし、教育効果を上げ、子どもたちに「生きる力」を身に付けることが求められている。

②　産山学園生の課題から

ア 県学力調査の結果から（令和6年12月実施）

〔国語科〕全国値の正答率を0としたときの割合

学年	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生
基礎	−0.3	0.7	9.1	−3.8	13.1	2.5
活用、記述	−9.6	0.4	−1.9	−0.7	5.8	16.7

〔算数・数学科〕

学年	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生
基礎	6.9	18.5	0.1	11.7	20.6	23.4
活用、記述	7.8	15.0	−4.8	15.6	13.0	34.2

学年に上がるごとに、学習の積み上げが行われていることが分かる。しかし、国語科では、前期課程において、基礎と活用の両方において全国の値を下回る学年がある。詳しく問題を見ると、どちらの教科においても「情報の扱い方に関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」の問題において課題があることがわかった。

イ　i-check の結果から（令和6年12月実施）

項目	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生	平均
成功体験自信	44	49	52	51	48	47	48.5
充実感と向上心	48	43	57	53	50	49	49.8

全国の平均を50と見たときの本校の値を見ると、「成功体験・自信」と「充実感と向上心」について低い結果であった。特に、前期課程では、「自分のいいところをいえますか」、「ものごとを行うとき、次に何をしたほうがいいか自分なりに考えて行動していますか」という質問に対する回答が低く、後期課程では、「授業や活動の中で、自分は人間として成長したな、少し大人になれたな、と感じることがありますか」、「ものごとを最後まであきらめずにやり抜く方ですか」という質問に対する回答が低くなっており、改善が必要である。

ウ　日常的な課題から

学園生は、１人１台のタブレット端末の整備や、各種検定の受検における費用が全額補助されるなど恵まれた教育環境にある。その反面、全体的に自ら学ぶ（問う）という主体性には課題が見られる。自分の考えをうまく伝えたり、根拠をもって自分の意見を説明したりするなどのアウトプットが苦手な学園生がいる。さらに、学習したことがその場限りになり、他者と協働して学びを深めたり活用に発展しなかったりすることもある。これは、授業中はもちろん、特別活動（行事・委員会活動等）、家庭学習、部活動など全般的に言える。

そこで、学校教育目標に近づくために、まずは授業を見直し、授業で身に付けたものが、他の学習や生活の場面で活用できることを目指す。

③　「主体的」に学ぶとは

学園生が自分たちで課題解決に向け探求的・協働的に学習し、達成感・充実感をもつ姿を目指す。子供の思いから学習が展開され、子供が当事者意識を持って行動し、自分なりの学びを創り出していくことが可能となるように、教師は、単元構想、子供の学びの支え方、評価等を探っていく。また、各学年、各教科、地域の特性を生かし、体験活動や表現活動の経験を自信に変えて、「次もやってみたい」と未来に自らの学びを進めようとする「学びに向かう力」を身に付けた学園生の姿が表れて欲しいという願いを込め、本研究主題を設定した。

④　義務教育学校の特性を効果的に進める取組から

令和５年度の研究の成果と課題をふまえ、「ステージ制度」を生かしながら、９年間の学びの連続性を意識した取組を職員の共通理解と共通実践により効果的に進め、学園生の学力向上を図っていきたい。

※ステージ制度：ファーストステージ１～４年／セカンドステージ５～７年／サードステージ８～９年

（５）「産山型学習」（熊本の学びの自校化）について

「産山型学習」とは、小中一貫教育における９年間を通して、「確かな学力」を育てる学習過程である。そのねらいは以下のとおりである。

①　学園生の主体的な学習を促すために課題解決学習を取り入れ、自ら学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れる。

②　思考力・判断力・表現力等を養うために、考えを練り上げるための個人思考の場や小集団思考の場を設ける。

③　思考の流れに沿った到達基準を設けて形成的評価を行うことで、成就感・達成感をもたせるとともに、知識・技能の定着や、思考力・判断力・表現力等の育成を図る。

「熊本の学び」を自校化した産山型学習

共通実践事項

産 山 型 学 習		
過程	児童生徒の視点から	授業者の視点から
うーん今日の課題は？	**◎めあてや学習課題をつかむ。** ・めあてや学習課題を確かめて、やる気を出し、学習の見通しを立てる。 「なぜ」「おそらく」（疑問や予想）	**◎めあての設定** ・本時のゴールの姿の明確化 **◎学習課題の工夫** ・切実感のある学習課題を立て、興味関心を高める。
ぶつかってみようひとりで！	**◎ひとり学びで課題解決に取り組み、自分の考えをもつ** ・学習課題を自分ごととして捉え、根拠を明確にした自分の考えをもつ。 「やってみよう」（挑戦）	根拠を明確にする。→論理的思考を促す。 ひとり学び（個人思考）⇔学び合い（小集団・集団思考） ・書く活動の充実 ・読解力の育成
やろうみんなで！	**◎学び合って、学習課題を解決する。** ・お互いの考えを伝え合い、自己の考えを広げ、深め、学習課題を解決する。 「なるほど」「きっと」（納得感）	
まとめふりかえろう！	**◎まとめ、ふりかえり、次時へつなげる。** ・わかったことを確認し、何を学んだのかを明確にする。 ・何ができるようになったのかを自分自身で振り返り、次時の学習につなげる。 「わかった」「できた」「もっとやってみよう」 （実感や達成感，更なる意欲）	**◎学びを実感できる主体的なまとめ** ・子供の言葉でまとめる手立て ・めあてや学習課題との整合を図る。 **◎学びを実感できる主体的な振り返り** ・ふりかえりの視点（あかうしどん）をもたせる。 ・次の学習への意欲をもたせる評価の工夫 →深い学びの発信活動へ

アウトプット

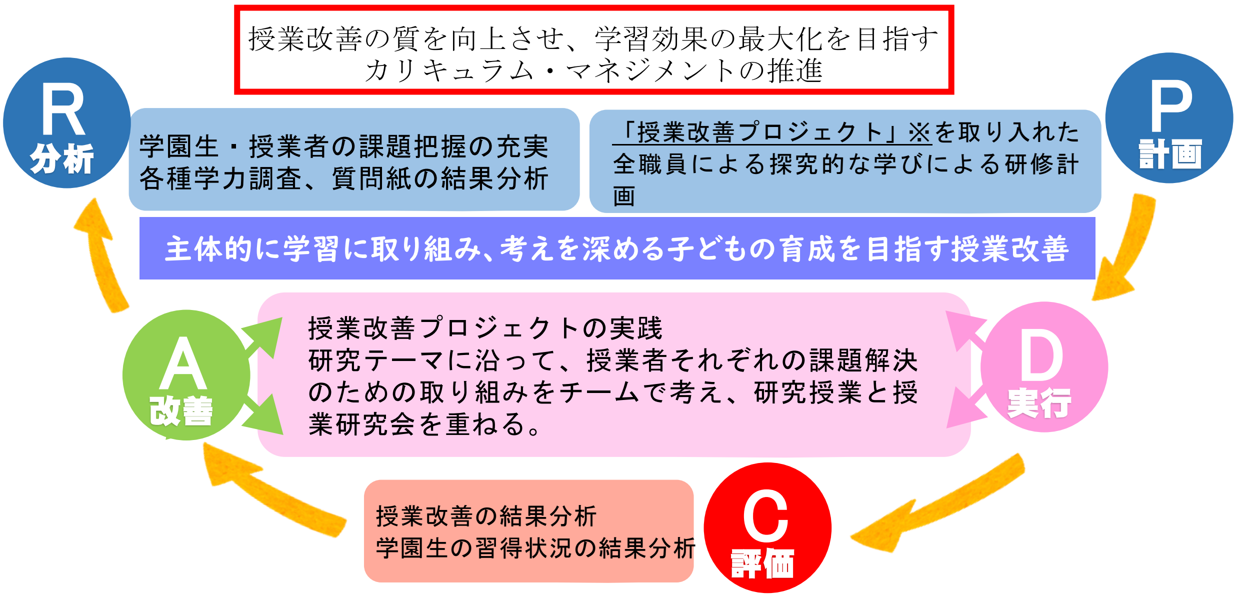
指導と評価の一体化

（６）研究の柱

柱１	柱２
実態をもとにした授業改善	学びとくらし、地域をつなぐ教育活動の充実
① 自力で情報を取り出す力をつける授業づくり **② 子ども自身が学びを確認する「まとめ」ができる授業づくり**	① ヒゴタイ・イングリッシュの充実 ② うぶやま学の充実 ③ チャレンジ学習の充実

（７）研究の方法

実態分析をもとにした授業改善を行うことにより、学びに向かう力や自己肯定感が高まり、学園生が確かな学力を身につけることを目指す。



（８）研究構想図

校訓　We have a dream　私たちには、夢がある
学校教育目標
ふるさとを誇りとし　夢や目標に向かって　主体的に考え行動する学園生の育
研究テーマ
主体的に学習に取り組み、考えを深める子どもの育成
Thinking
9年間を
見通した
Challenge
つなぐ　つながる
カリキュラム
Teamwork
内容①
実態をもとにした授業改善
① 自力で情報を取り出す力をつける授業づくり
② 子ども自身が学びを確認する「まとめ」ができる授業づくり
内容②
学びとくらし、地域をつなぐ教育活動の充実
① ヒゴタイ・イングリッシュ
② うぶやま学
③ チャレンジ学習
うぶちゃん
人権教育の視点・ICT 教育の推進
信頼される学校づくり
コミュニティ・スクール
地域と連携した居場所づくり
学園生の実態・願い
地域学校協働本部
（学校応援隊）
保護者・産山村の願い